おかあさん あっちむいてて

岩本敏男作　東　貞美絵

子どもの文学

おかあさん あっちむいてて

NDC 913　偕成社　158p　23cm　1981年

発　行　1981年11月　初版第1刷

著　者　岩本敏男（いわもと としお）

発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
電話（03）260—3221（代）　〒162
振替 東京5—1352番

印　刷　新興印刷製本株式会社

製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

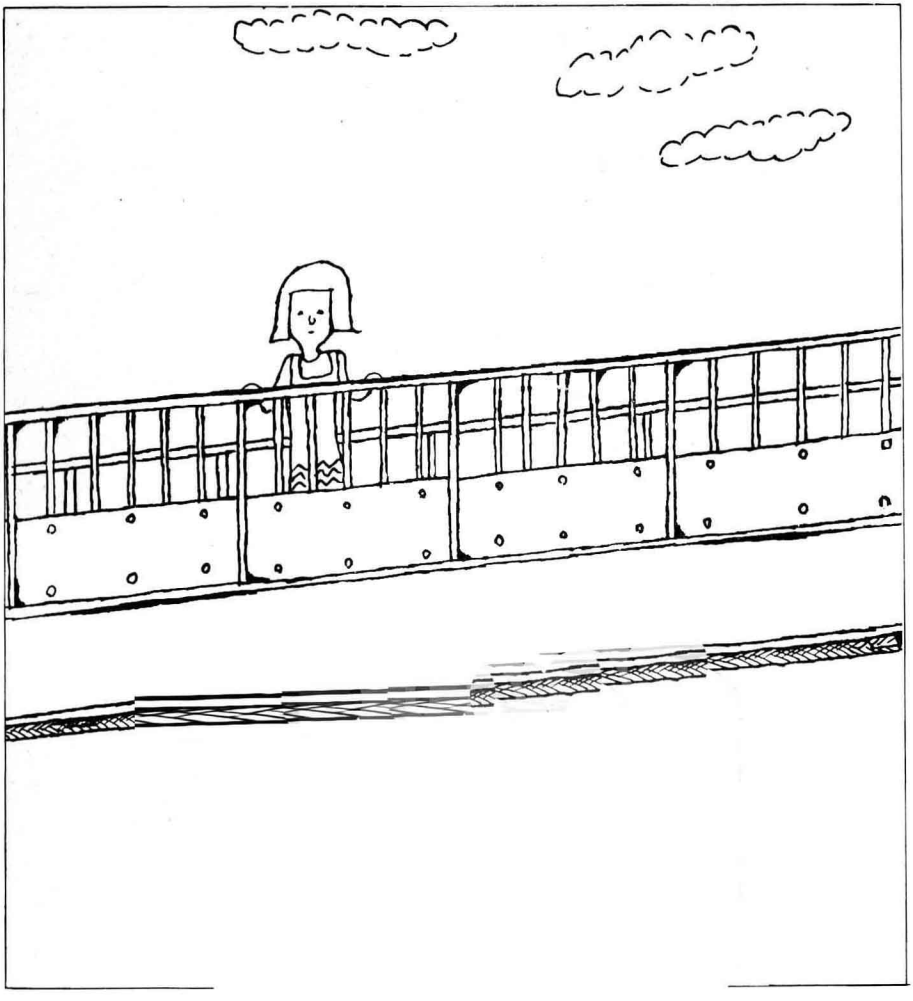
ISBN4-03-626490-8

Printed in Japan

©岩本敏男　東 貞美　1981

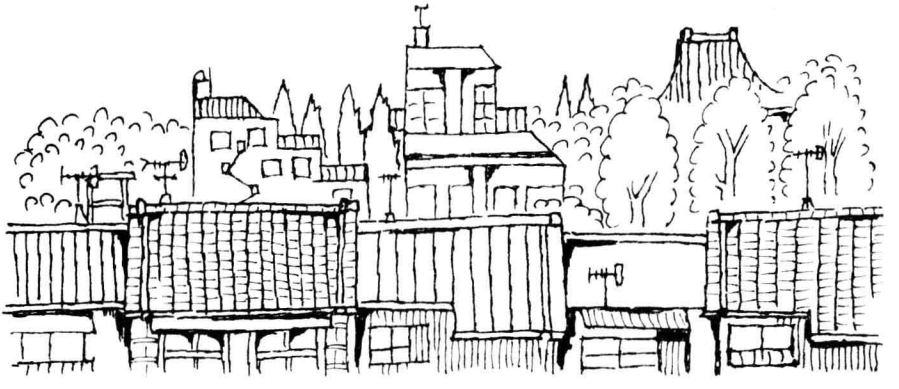
おかあさん あっちむいてて

岩本敏男作　東　貞美絵



はじめに

おかあさん　すきよ
だけど　だれかさんもすきよ
どちらがよけいにすきかというと
だれかさんのことを　かんがえると
わたし　すごく
やさしい気持ちになるの



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おかあさん あっちむいてて／もくじ

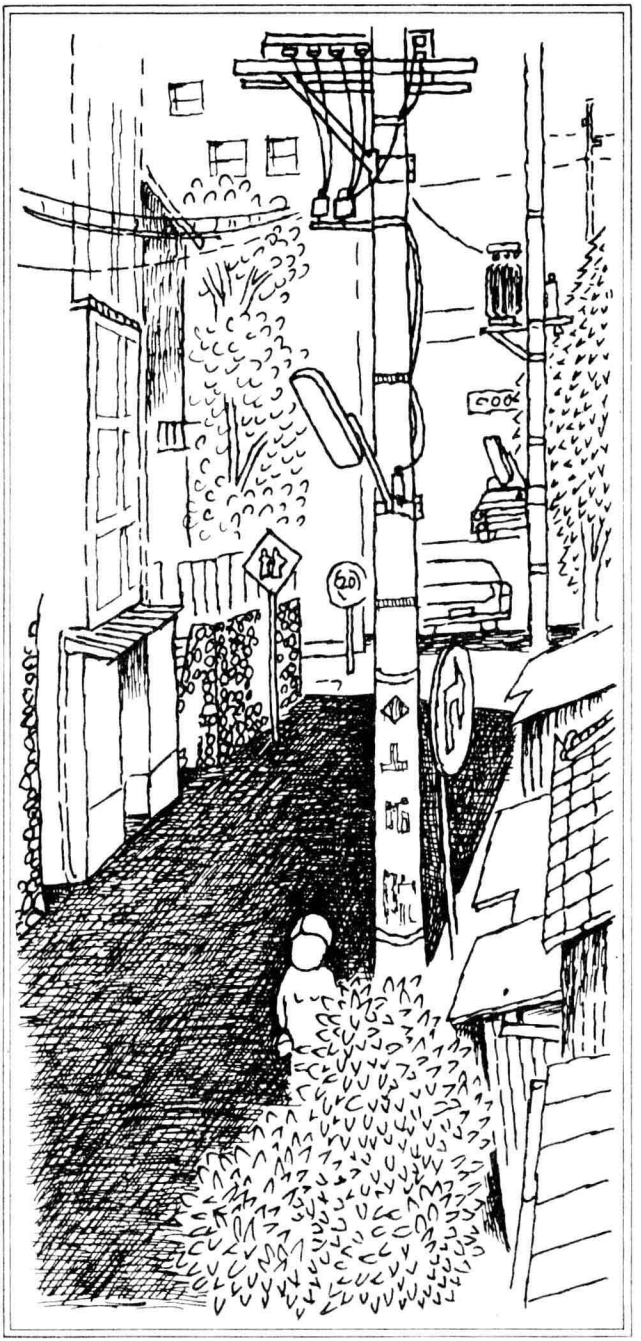
第一章　始業式のあとで　8
第二章　骨皮スジ子　22
第三章　男の子と女の子　43
第四章　夏やすみがはじまった　62
第五章　はじめてのデイト　80
第六章　いちょうの木の下で　97
第七章　ラブレター　113
第八章　二百円の指わ　134
あとがき　158

作者・**岩本敏男**（いわもと　としお）
京都に生まれる。京都師範学校卒業。日本児童文学者協会会員。『からすがカアカア鳴いている』で第11回赤い鳥文学賞を受賞する。作品には，『岩本敏男詩集』『スッパの小兵太』『ゆうれいがいなかったころ』『ながくてみじかい夏休み』などがあり，特異な作風で知られる。住所／京都市山科区竹鼻地蔵寺南町３

画家・**東　貞美**（あずま　さだみ）
神戸市に生まれる。関西大学卒業。在学中より国画会に出品。国画賞，優作賞，第５回福島賞を受賞。1960〜62年ニューヨーク滞在，1978〜79年スペインに滞在する。児童書の仕事としては，『ながくてみじかい夏休み』『からすがカアカア鳴いている』『まどみちお詩集』などがある。住所／東京都新宿区矢来町41

おかあさん あっちむいてて

岩本敏男



第一章　始業式のあとで

わたし、やっぱり気になってたんよ。始業式のときにも、ちょこちょこっと見てたんよ。見てたけどわからなんだから、二階の教室へはいると、すぐに中庭の見えるまどぎわへいったん。男の子がかたまっていたから、うしろからのぞいてみたん。中庭では、五年生の組がえがはじまってた。

きんやくん、きてへんのかしらん？　背のびしてさがした。ふとってて、ねむたそうな目をしたきんやくんをさがしたん。きてないみたい。どうしやはったんやろ？

「おすなよ！」

中田くんがうならはった。

「おしてへんわ！」

中田くんをにらんどいて、まどぎわの一列めのいすに、わたしは横ちょに腰かけた。

おかしいな。きんやくん、かぜでもひいてやすんではるのやろか。ちがう、そんなんとちがうわ。サングラスかけたおっさんがお店にきて、学校へこられへんのかもしれのやわ。ああいうおっさんは、ピストルをもってるもんな。おかあさんといっしょにくくられて(しばられて)、野郎ども、しずかにしろとかなんとかいわれて、えらいめにあわされてはるのとちがうやろか……。

「うっとうしいな。」

ほんまにうっとうしそうにして、しのぶちゃんがそばにきやはった。わたしのまえのいすに腰かけはった。

「わたしら、三年四組から四年四組になっただけやろ。組がえもないし、先生はもち上がりやし。いっぺんぐらい男の先生にならいたいと思わへん？」

「さあ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しのぶちゃんは、わたしんとこのうらの、アパートとマンションのあいだみたいな〈西山ハイツ〉の子。そして、しのぶちゃんのいうてはる男の先生は、原先生。それぐらいのことわかってたから、わたしはええかげんにへんじをしたん。

「大学を出たてでヤングやし、それに背は高いし、かわいらしい顔してはるし、すきやわあ。ひろし（しのぶちゃんの弟）の家庭訪問のとき、カッコええ先生やなあいうて、おかあちゃんもファンにならはって、参観日にはすいすいといかはるわ。」

しのぶちゃんは、三年生のときからそういうてはった。

「わたし、原先生がうけもちやったら、ぜったいにがんばるのやけどなあ。」

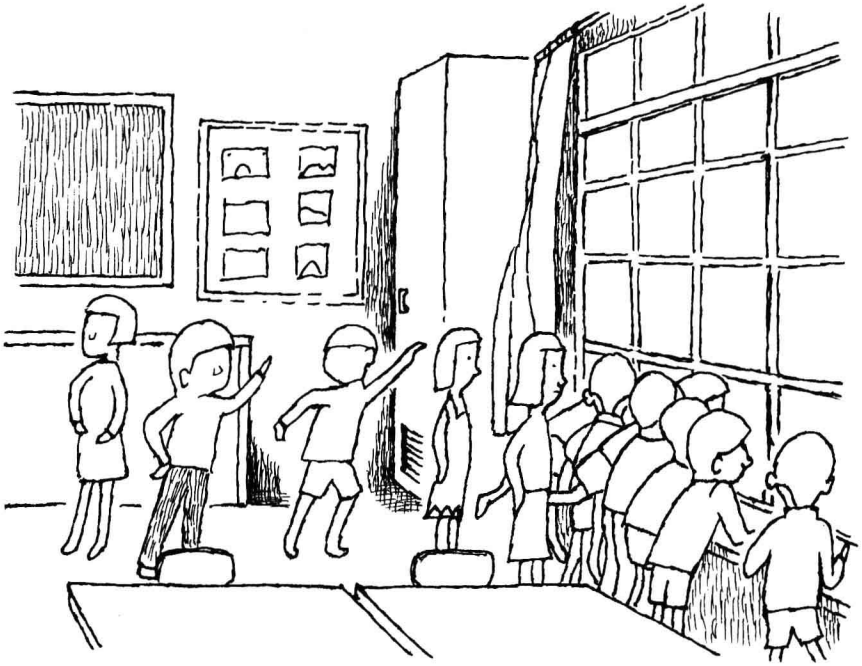
そんなことというてはったんよ。

わたしがぶすっとしてたから、しのぶちゃんは、みかちゃんとおしゃべりをはじめはった。

もし、きんやくんのことをしのぶちゃんにいうたら、なんていわはるやろ。つくえの上を指のさきでなでながら、わたしはぼんやりかんがえてた。

「あんた、あんな子がすきなん？」
わたしのことをバカみたいに見て、きっとそういわはるわ。すきもきらいもないのに、そういわはるわ。
きんやくんとわたしは、うまれたときからの、おしめをしてたころからの交際やわ。二年生の二学期ごろまでは、となりどうしやったんやもん。
「ちいさいころからのなかよしのことを、おさなじみというのんよ。」
おかあさんがいうてはったわ。
うんとちいさいころには、ふたりともおかあさんにだかれて、つかみあいのけんかをしてたんやて。そして、声をそろえて泣いたんやて。それやのに、どうしてなかよしやったんかというと、なかなおりのキスをしたんやて。いややわ、そんなん……。
ほんとに、すきもきらいもないのんよ。きんやくんのこと、気にしてるだけ。心配してるだけなんよ。
なんでかしらん、いやーな感じになってきて、いすから立とうとしたら先生やった。大

きな声がしたん。
「これこれ、なにしてるの。席につきなさい！」
まどぎわにいた男の子が、カエルみたいにつくえにとびついた。それでも中田くんがつかまって、頭をおさえられはった。
「四年生にもなって、中庭がそんなにめずらしいの？」
「そんなこというても、ぼくらどこへすわったらええのかわからへん。」
頭をおさえられたままで、中田くんがいいかえさはった。
「そんなこと、まえのとおりでよろしいやろ。」
「席がえないのん？」
「それはあとで。」
北松うめ子先生は、女の先生のなかでは超ベテランなんよ。しのぶちゃんがいうてはったけど、おむこさんもどこかの先生をしてはるし、むすめさんも、去年から先生をしてはるのやて。



先生ばっかり三人やったら、家のなかも職員室みたいやろな。テレビかって、教育テレビを見てはるのやろ。

みんな席について、〈きょうから四年生〉のお話をきいてるうちに、わたしはほかのことかんがえてたん。

そうやわ。テレビというたら、おとうさんが、日曜日にゴロ寝して、見てはる競馬中継。きんやくんのおとうさんも、〈5—6〉やとか〈1—3〉とかいうて、競馬でものすごうまけはって、それで借金ができたんとちがうやろか……。

まどからなまぬるい風がはいってきた。

わたしはまた、きんやくんのことをかんがえてたん。

「雨がふるかもしれんよ。ぐずぐずせんと、はようかえりなさいね。」

先生にそういわれて教室を出るとき、たしか、しのぶちゃんがよんではった。そやけど、わたしはいそいでたん。中庭のすみっこを、花壇をふまんようにあるいていったん。

校門のとこで、三年生の男の子がけんかしてるのをちょっと見て、わたしは左へいった。国鉄のアパートのさくらが満開やったわ。それから、ゴルフの練習場のかどをまがると、あとはまっすぐ。アスファルトの道がゆっくり坂になってた。川の土手に野菜をならべてるおじさんが、首にタオルをまいて空をながめてはった。つられて、わたしもながめたら、うすぐもりやったのに、ずんずんくろう（くらく）なっていくみたいやった。

ふるのやろか。橋をわたっていったら、スーパーの倉庫のまえに、大型のトラックがとまってた。おしりをむけてラーメンの箱をおろしてた。

外環状線。信号が青になるまで見てたけど、わたしは歩道橋のとこまでいった。そし

て、階段を上がっていったん。ちょうどまんなかぐらいでとまって、きんやくんとこのお店を見たん。カメラ屋さんとパン屋さんのあいだのお店。

シャッターがおりてたわ。二階のまどもしまってたし、カーテンもひいてあったし。つぶれてしもたんやな……。ぽかんとして、わたしはお店を見てた。

きんやくんとこが、いまのお店つきの住宅にひっこさはったのは、わたしがまだ二年生で、運動会がおわったころやったわ。お店をはじめはって、一年とちょっとぐらいやのに、それがつぶれてしまうやなんて。なんという運命やろか。

「あーあ。えらいちがいやわ。」

ひっこしのおてつだいからかえってきて、おかあさんはうらやましそうにいうてはった。

「平井さん（きんやくんとこの名字）とこは、きれいなお店をもたはって、はじめはるというのに、わたしらは、いつまでこんなとこにおらんならんのやろ。文化住宅いうても名まえだけやわ。ガタピシやし雨はもるし。」

おかあさんの顔は、うらやましいというよりか、うらめしそうやったわ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com